

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

研究会基本情報

タイトル：「「もの」の人類学的研究(2) (人間 / 非人間のダイナミクス)」 (平成27年度第2回研究会)

日時：平成27年7月12日 (日) 午後14時より19時

場所：AA 研306室

報告者1：檜垣立哉 (大阪大学、AA研共同研究員)

「冶金学・ドゥルーズとテクノロジー」

報告者2：山崎吾郎 (大阪大学)

「関係性の連鎖とコミュニケーション：意識障害をめぐる実践論」

概要：まず研究代表者の床呂郁哉 (AA研所員) より本年度後半の研究計画の説明と、

今回からの初参加者の自己紹介に続き、いくつかの連絡事項のアナウンスを行った。

その後、檜垣立哉 (大阪大学、AA 研研究員) と山崎吾郎 (大阪大学) の2名による研

究報告と参加者全員によるディスカッションを実施した。

その内容は下記の通りである。

まず檜垣氏の発表では、近年の思弁的实在論、対象志向的思考、新しい唯物論など、ド

ゥルーズおよびドゥルーズ = ガタリ的思考と連関するさまざまな系列のなかで、「もの」

そのもの、あるいは対象性にかんする新たな考え方が表れているという論脈を紹介し、そのなかでも人類学に関連するものとして、フィリップ・デスコラや、それを批判的に展開するヴィヴェイロス・デ・カストロなどの議論における多自然主義やパースペクティブ主義がこのような思考の方向性とどのように連関したものであるのかについて簡潔にとりまとめ、そのうえで、そうした発想が源泉ともしているドゥルーズ＝ガタリの議論について考察した。とりわけカストロの議論との連関については、現在発表者と、研究会に所属している山崎氏との共訳が近刊予定であるため、とりわけ詳しく紹介をし、ここでの発表との連関についてさまざまな意見を伺った。

発表は、ドゥルーズ＝ガタリが『千のプラトー』の後半部で主題にしている「冶金術」という、金属を対象にしたテクノロジーの特権視と、そこでの徒党集団としての冶金術師達のあり方に光をあてた議論とを検討することによりすすめられた。この部分は、もちろん一面では人類学的(考古学的)な人間の生の古層に辿りつつ、ドゥルーズ＝ガタリが、メジャー科学(国家を支える科学)とマイナー科学(国家に従属しない科学)、条里空間と平滑空間などについて論じる場面であるが、根本的には、ドゥルーズ自身の一義性の存在論におけるアリストテレス的な種差によるヒエラルキー的区分への批判とその対案の提示、さらには生物学や人類学における、進化の系統や、家系の系譜の考察などを組み込みつつ、ドゥルーズ＝ガタリ自身の論じたい「物質的なものの生命」について肯定的にのべていく部分である。そこでドゥルーズ＝ガタリは「機械的系統流」

(Phylum machinique)という語彙を際立たせながら、金属とそれをあつかうものが備えている独特のマイナー科学性、ノマド性についてとりあげていく。

冶金術師を議論する論点には次のことがある。一方で、テクノロジーについての議論は、農耕の成立とともに語られ、それとハイデガー的なテクノフォビアの視角とが重なるということがある。だがドゥルーズ＝ガタリは、農業をむしろ国家そのものを可能にする条里空間との関連においてとらえると同時に、土地を持たず、むしろ文字通りアンダーグラウンドに地中を掘り下げる冶金術師たちの固有な「行為的直観」こそを、テクノロジーの原点ととらえ、それを「物質のノモス」にしたがうことととのべるのである。そこでは金属そのものの流動性が、物質性のある独自の一面をひきだしていること(金属の生命主義、金属的なるもの生命)と、それが装飾具、武器、そして貨幣(資本主義)さらには音楽と関連することの意義がひきたてられる。またそれとともに、冶金術師たちの土地なく群生的な生そのものが、ノマド的な生のひとつの典型として語られることにもなる。ある種の徒党集団として存在する冶金術師たちこそが、ドゥルーズ＝ガタリがリゾームと考える砂漠や海を突っ切り、国家に従属しない群体として離散集合を繰り返す本質的な力を秘めているものとして捉えられるのである。こうした徒党手段は現代においても、もちろんさまざまな多国籍企業、政治宗教的結社、音楽や芸術の諸団体においてみられるものでもある。

最後にこうした徒党手段の現在的な形態としての生物学者というヴィジョンが、ラト

ールその他の科学人類学との関連づけられる点についても述べた。

ドゥルーズ＝ガタリの議論は、そもそも厳密な実証性に依拠するものではなく、人類学的考古学的なアイデアの転用であることは否定できないが、同時にこうしたアイデアが現代のラトール、デスコラ、カストロなどの人類学者の方に再援用され、さまざまにもちいられなおしていること、それが「金属」という特殊な「もの」を巡ることに原点があることについてさまざまな議論がおこなわれた。

第二の報告者の山崎吾郎氏の発表では、「終末期」と呼ばれる状況で、意識障害を抱えた患者をとりまいてなされるコミュニケーションの諸相に着目して、身体の機能が徐々に失われて行為が不可能になっていく連続的な時間経過のなかで、身体の見方やそれへの関わり方が変化していくことを、行為の結合様式の問題にひきつけて検討した。

医療技術の身体への介入が、身体の断片化やモノ化を引き起こしていることは繰り返し指摘されてきた。この場合、身体のモノ化のプロセスの独特な側面は、むしろモノとしてみてしまう故に人間の情動に変化が生まれるという点(たとえば、「人間の尊厳が失われる」といった言説)にあり、身体の内在的な「力」の特性を理解することがいづれにしろ不可欠となっている。発表者のこれまでの研究は、身体のモノ化や経済化のプロセスが、情動を介した新しい秩序の生成と同時に生じることを論じるものであった。本発表では、身体が連続的な時間経過のなかで身体的機能を失っていく状況(究極的には身体でないものになる状況)を想定しており、行為の質が連続的に変化するという点

で、断片化した身体においてなされた議論と差異がある。つまり、断片化のように、外部からの技術的な介入によって身体が切断される契機を論じる議論は、連続的な時間の経過を前提とするような、療養型病院での実践を理解するには適さない。身体の「死」を漸進的なプロセスの極限として考えるには、切断よりはむしろ連続性をひとつの変化としてとらえる議論が必要になる。このことは、療養型病院の現場において事実が作られていくプロセスが、科学的な行為とは異なっていることとも深く関わっている。続いて、病院内における実践の特徴を検討するなかで、身体の働きを理解するための理論枠組みが、ハビトゥスや身体化の議論とは異なった個体化の議論と関わりをもつことを確認する。そして、デューイのプラグマティズムをとりあげ、モノ = 身体を個体として認識するプロセスを記述する際に、行為の結合様式に着目するアプローチを検討する。そのことで、技術的環境のなかに現れる(テクノ)アニミズム論の可能性について議論した。以上の山崎氏の報告を踏まえ参加者全員で、身体のモノ性をめぐる人類学の理論的枠組みなどをめぐって活発な討議が行われた。